

宇都宮大学  
平成 30 年度 卒業論文

近代における個人の時間の必要性について

教育学部 総合人間形成課程

151620M

河村 駿

## 目次

### はじめに

#### 1. 1人でいることの意義

- 1-1. 自分自身を見つめ自律性を獲得すべき場
- 1-2. 趣味・娯楽の場

#### 2. 集団に身を置くことの必要性

- 2-1. 周囲と合わせてつくられる自分
- 2-2. 趣味や娯楽の集団的つながり

#### 3. 個人の時間の在り方の見直し

- 3-1. 個人の時間における自分が本当の自分ではないのか
- 3-2. 個人の時間と適応する趣味

### おわりに

### 参考文献・URL

はじめに

小学校、中学校、高校、大学そして社会に出てからというもの、私たちは大半の時間を集団の中において過ごしてきている。自分以外の様々な考え方、行動を起こす他者たちとともに同じ時間を過ごすことで、新たな価値観を発見したり、より見聞を広めることができたりすることができる。生きていくうえで集団に身を置くことは人間的に成長するためには必要なプロセスであり誰も必ずと言っていいほど通る道である。

しかし、実際に友人の話を聞いたりネットやニュースなどを見ていると集団の中にいるときよりも、個人での時間を過ごしているほうが気分が楽である、充実感がある、などのプライベートな空間・時間を自主的に選択しており現代における1人の時間も度外視できないことが私自身理解できた。

また、個々人の自由に関連して、イギリスの思想家 J.S.ミルは彼の著作「自由論」において個性の自由について、なぜ人間の個性の発現は制限を受けるべきでないのか（自分自身の責任と危険とにおいてなされる限りにおいての意見の実行についての自由）、ということが社会と個人にとってのメリットの点から論じられている。

社会にとってのメリットについて、社会が進歩していくためには変革や進化が必要だが、そのためには習慣にとらわれない独創性が必要であるとミルは述べている。つまり、習慣からの圧力が強く独創的な天才的な個性が制限され、凡庸であることが美德として認知される社会では進化や変革は起こらず、濁った水たまりのような社会になってしまうと述べている。故に、社会が変革され発展していくためには、独創性を許容する傾向、つまり、自由な個性が保障されていることが必要だということである。ミルの説明によると、人間というのはそれぞれ異なっている。思想や良心も人それぞれ異なっている。それ以外のありとあらゆる側面でも人間は互いに異なっている。つまり、人間が成長するために必要な刺激も個々人の間で異なっているのである。しかし、習慣に基づく平均的な行動しか許されない社会では、個々人が成長のために要求する多様な刺激をカバーすることはできない。集団の調和を第一とする日本の集団社会においてはなおさらのことである。つまり、個々人がそれぞれ成長していくためには、習慣にとらわれることのない多様な行動とそれに伴う多様な刺激が必要であるということをも主張している。言い換えれば、自由な個性の発現を保障するということが個々人の成長の可能性を広げることでもあり、それがミルの曰く個性の自由が個人に与えるメリットなのである。

こういった経緯から、個人の時間を選択することで、幸福を人間の独自性の展開として個性の追求に焦点を当て、ミルにとっての、人間が多様な存在（経験的事実）であり、自発性が固有の価値を持つなら、自由は幸福にとって重要な条件の一つであるということを論の核として進めていきたいと思う。

## 1. 1人でいることの意義

はじめにでも述べたが、私自身は日常生活において1人でいる個人的な時間は価値のあるものとして重要視されるべき項目であるとした。では、どういった点において必要性があるのかここではいくつかの考えをもとに論じていきたい。そこで本論では「自分自身を見つめること（自己内省）による自律性を高める場」「趣味・娯楽の場」の2つの点において必要であることで論を進めていきたいと思う。この2つを挙げたうえでここでは上記でも述べたがミルの「自由＝幸福追求ゲームを営むための自由」という功利主義的考え方を元にしてきたいと思う。他者に危害を加えない限りでは個々人が幸福を追求し続けることは自由として正当化されるという考え方であり、個人の個性を開花させていくことで社会全体の幸福をつくりあげていくことが自由の条件であるという。単純な自分の利益のために周囲になりふり構わない自己中心主義と異なり、あくまでも周囲との共存を前提として考えた際に、集団と個人と相互の最大幸福を考慮することが社会の在り方になってくると考えられる。ミルは人間の身体に直接的に快感をもたらす身体的快楽よりも知的快楽や人間関係によりもたらされる精神的快楽のほうが重要視されるべきだと述べており、そのうちの人間関係をここでは題材として取り上げたい。自分と周りとの関係性を整理して精神的に安定しかつ幸福でいられる状態があるがままの自分であり追い求めるべき理想像であると思われる。その上で1人の時間を選択することが自分にとっての、集団にとっての幸福であり自分らしくあるために必要な状態だと考える。ある事象に対して自分がその時どういった選択、行動をとれば自分にとっても周囲にとっても最上の結果となったかを自身の内で再考慮し、個人の幸福を満たすための手段（今回でいうところの趣味や娯楽）を追求し、自分で考えたうえでの最良の選択が取れたという自律の認識がなされるといった関連性が考えられた。

また、全体を通して「自分らしさを見つける」という役割も持ち合わせているとも考えられる。このことにどういった必要性があるかについてはアメリカの発達心理学者 E.H.エリクソンの「アイデンティティ論」を基軸とさせていただくことにする。アイデンティティという概念を中心に人間の精神・社会的発達にはおよそいくつかの段階（ライフサイクル論）があり、その中でアイデンティティは幾度となく分裂と統合（対面した課題の解決の成功、失敗）を繰り返し、いつしかそれは人生を通しての課題となりそれぞれの段階における課題を解決、つまりはアイデンティティを確立していくことで人は成長していくと

いう。またエリクソンは「人間が生存する社会というジャングルの中では、自我アイデンティティ（社会的に（他者によって）共有された、価値関与的・統合的意識作用の一貫性の感覚）なくしては、人は生きているという感覚を持つことができない。」（E.H.E.1965 “Childhood and Society” Penguin Books p232 より）と述べていることから、自分がほかならぬ自分として存在することで、生き生きとした実存性を実感することが自分らしさに形作られていくのだと思われる。集団においてこういったものは見つけられ得るとも考えられるが個々人の時間において自分が自分であるという一貫性を持ち、自分がどこへ向かっているのかを考え、他者から見える自分と自身が思い描く自分とを一致させようとし、自分と社会のちょうどよい結びつきについて考慮することで、他人に影響されない「純粹」な自分らしさという実存性をより実感できるようになり、あるがままの自分を見つけれらるのではないのだろうか。内省、そこからの自律性への獲得を向かうというプロセスを発見し、それを趣味・娯楽というツールとして体現するというのが自分らしさを見つける上での図式となりえるのではないのだろうか。

これらの考えを前提として論を進めていきたいと思う。

#### 1-1. 自分自身を見つめ、自律性を獲得すべき場

1人の時間の存在意義として、まず自分の在り方を考える場としての役割があると考えられる。集団という多数の個性が行き交う空間の中、埋没しないためにも自己を鑑みることによって自分はこういった人間なのかを考える必要がある。具体的な例としては、現代では集団による個人に対する一方的な社会的イメージの形成という現象がたびたび見られている。はじめは半強制的につけられたイメージに当惑するが、まわりからそういった見られ方を続けられることで、いつの間にか周囲への期待を裏切るまいとそのイメージを無意識に吸収していき、かつて自分が思っていたものとは違う存在がそこにいる、いったことがある。自分で作り上げていくべき自身を他人が勝手に作り上げたイメージで妥協してしまい、自分で選択、思考して作り上げていく自己を否定することになりかねない。船津（2005）は人間の「自分自身との相互作用」においては、内省による新たなものの創発という「創発的内省」がなされており、「創発的内省」の展開によって、他者の期待の修正・変更・再構成がなされ、そこに新しいものが生み出されると述べている。このことから、個人の時間は自分という一個人とのコミュニケーションの場であり、それは自分自身を再認識し、良

い面を伸ばし悪い面を修正し、自己と他者の関係を再編成し、新しい自分を生み出す場としての価値を有すると思われる。

また、自己との対話について対話的自己理論というものがある。個人の内部にあるかのように見える「自己」を「対話」という観点から捉え、自己と社会の密接な関係を理解し直そうとした試みであり、オランダの心理学者ハーマンスらによって提唱された。ハーマンスはその世界観について次のように述べている。

～われわれは、想像上の世界における比較的主体的な「私」のダイナミックな多数性をにらみつつ、自己を概念化する。最大限簡潔に述べれば、この概念は次のように定式化される。すなわち、「私」は状況と時間の変化に応じて、あるポジションから他のポジションへと空間のなかを移動することが可能である。「私」はさまざまな、そしてときには相反するポジションのあいだを行ったり来たりする。「私」は、想像の上においては各ポジションに声を授ける力を有している。結果、両ポジション間には対話的な関係が生まれる。声は物語における登場人物とやり取りをするかのように機能する。いったん登場人物が物語のなかで動きを与えられると、その登場人物は独自の人生を帯びるようになり、語りが必要とするお膳立てができあがる。各登場人物は、独自のスタンスから経験について語るべき物語をもっている。これらの登場人物は、さまざまな声でそれぞれの「私」や世界についての意見を交換する。結果、そこには複雑な語りによって構造化された自己の世界ができあがる。～

出典 Hemans, H.J.M.(1992).Telling and retelling one's self-narrative: A contextual approach to life-span development. Human Development

こういったことから、様々な角度の自身とのイメージを自身の内で共有することで集団においては作られない自分らしい自分をイメージすることができると考えられる。

このように自分について考えることを大前提として、自己決定力を養う、自分ひとりでものごとを考えるとすることが必要であり目的となると考える。自分ひとりしかその空間に存在しないことから、なにをするにしても自身で考えて行動を起こさなければならない。また、個人のものであるからして自由に使うことができ他人にどうこうできるものではない。けれども、現代日本の集団においては同調圧力による不安感、ストレスを感じる場面は多く、集団の輪を乱してはならないという心理から自分を押し殺す、自身の選択を曲げるといった声はよくあがる。すべての価値観や性格が同じ人間は存在しないということを考えれば、集団が大きくなるほど全員の意見が一致する確率は減少していくことがわかる。

しかし現実を見ると、国や地域、学校や企業などの大きな集団においても、すべての人の意見が一致しているかのような行動を示す。これにはさまざまな理由が挙げられるが、やはり根本的な理由は、自分が集団から排除されないようにするため、あるいは面倒な争いごとに巻き込まれたくないために、同調が生じていることであろう。

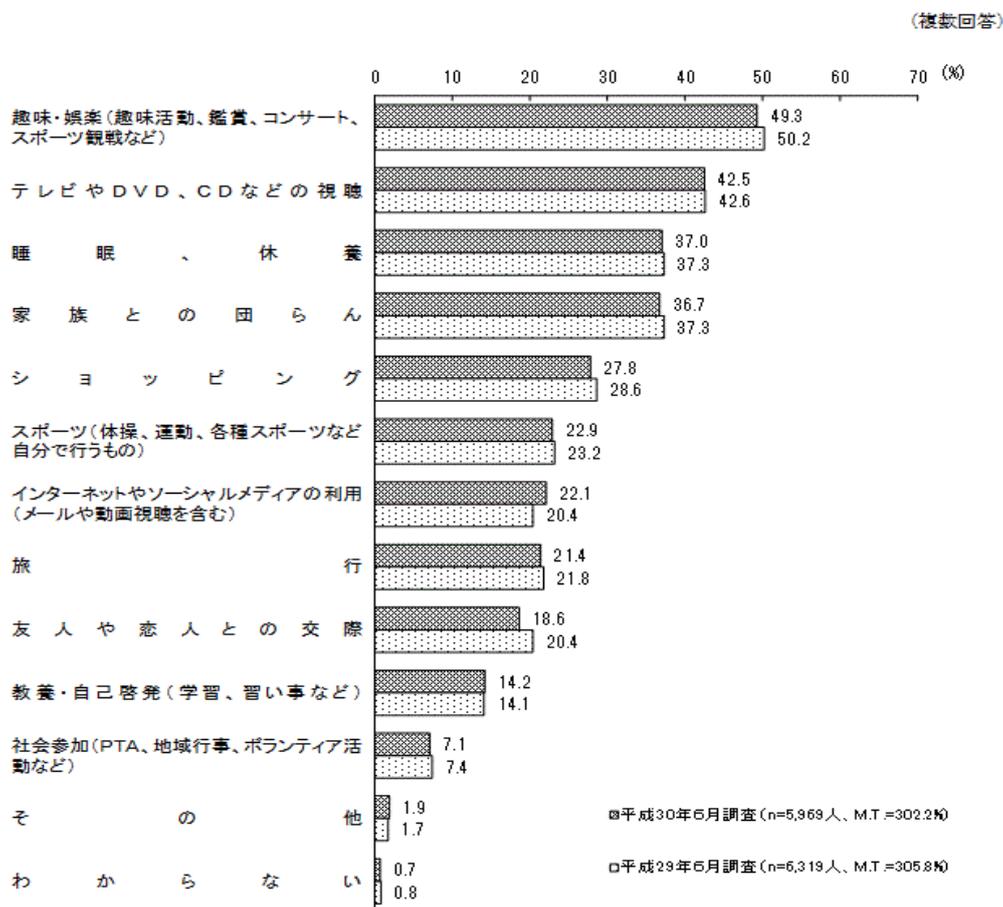
そういった同調の力に屈しないためにも、個人でいる時間において自らで考え、動くことで集団に身を置く時間においてもただの一個人としてではなく、意思のある個人として存在すべきだと考える。周囲の人たちに同調するのではなく、あくまでも1個人として他者と平等であることが他者と区別をつけることであり、自律を助けるものであり、そういった場を重要視する価値の理由となるのであると考える。

## 1-2. 趣味、娯楽の場

2つ目に趣味、娯楽に費やす時間としての意義があることを論じたい。例として、集団における趣味・娯楽に影響を受け自身もそれをはじめるといった場面がある。もちろん周囲からの好影響により結果それが自身の一部となりよい働きかけをするようになることは考えられる。けれども、はじめに述べた「人間には個人の自由のためにも“選択”をすることを保障されなければならない」ということから、個人において趣味・個性を選択することも自分を形作るには必要ではないのだろうか。

内閣府の平成30年度「国民生活に関する世論調査」の「現在、どのようなことをして自分の自由になる時間を過ごしているか」という質問について「趣味・娯楽（趣味活動、鑑賞、コンサート、スポーツ観戦など）」の割合が49.3%と最も高く「テレビやDVD、CDなどの視聴」（42.5%）、「睡眠、休養」（37.0%）、「家族との団らん」（36.7%）と続いた。一方で、「友人や恋人との交際」（18.6%）や「社会参加（PTA、地域行事、ボランティア活動など）」（7.1%）などの集団において時間を過ごす項目はこれらに比べると割合が低く出ていた。このことから、自分の時間を持つことにより、自分個人のための時間に活用する人が多数派であることがわかった。（表1-1）

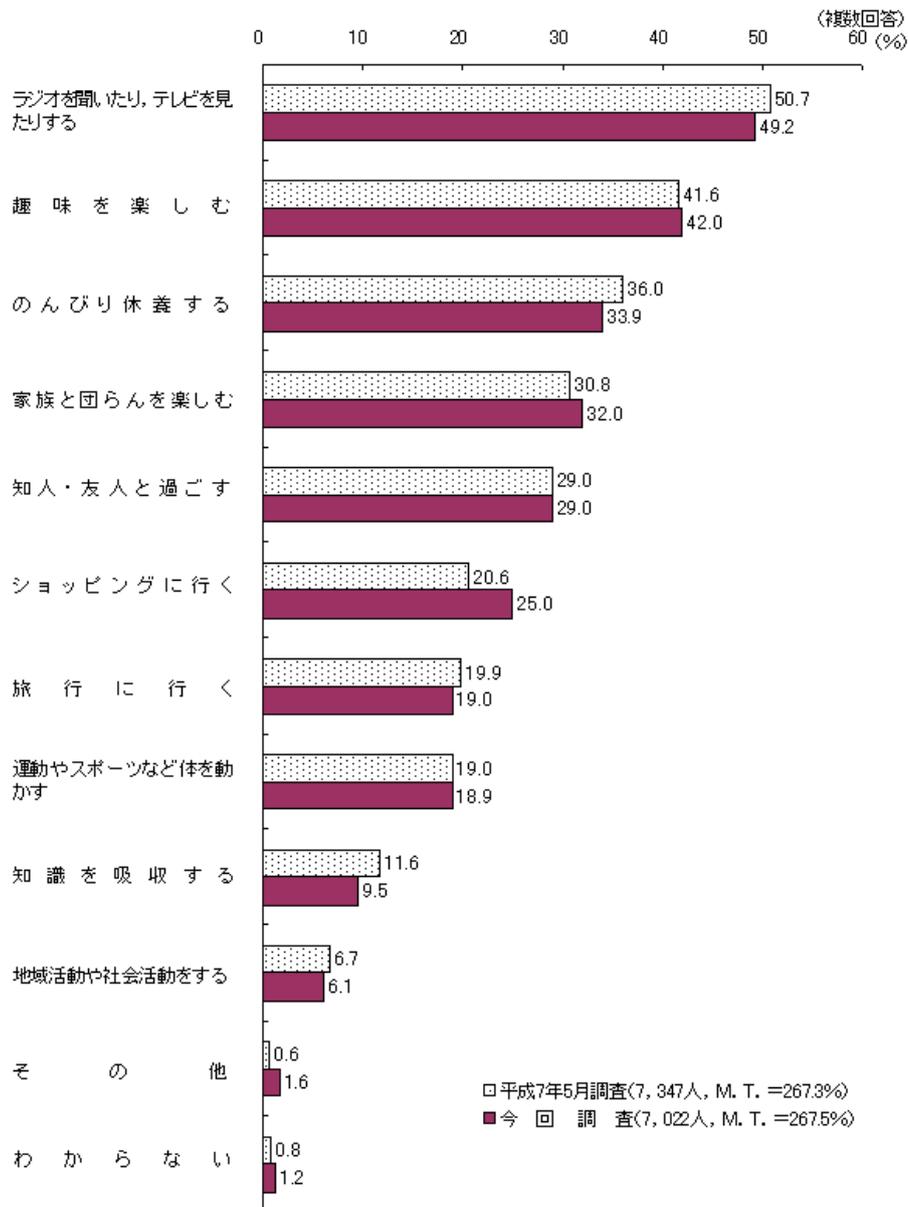
表 1-1 自分の自由時間の過ごし方



出典 内閣府 平成 30 年度「国民生活に関する世論調査」

同じく内閣府の平成 11 年度「国民の生活に関する世論調査」の「現在、どのようなことをして自分の自由になる時間を過ごしているか」という質問について、「ラジオを聞いたり、テレビを見たりする」(49.2%)、「趣味を楽しむ」(42.0%)、「のんびり休養する」(33.9%)という主に個人の時間で行われる項目が上位を占めていた、かつ趣味に関する項目もこの時から割合が高かった。(表 1-2) このことから、最近の約 20 年の間自由な縛られない時間においてはプライベートな時間、その中でも趣味・娯楽における時間が価値があるとされてきたことがわかった。

表 1-2 自分の自由な時間の過ごし方



出典 内閣府 平成11年度「国民の生活に関する世論調査」

近年では、「1人焼肉」や「1人カラオケ」など1人において様々なジャンルのものごとを楽しむ人たちが増えてきている。人々が「1人であること」に対して肯定的な考えを持つようになったように思われる。少し前までは、1人でごはんを食べるのが恥ずかしく、トイレでごはんを食べる「便所飯」のように「1人で何かをすること」は否定的にとらえられてきた。けれども、現代ではスマートフォンやSNSの発達により「常時接続社会」となっており、「ネットで趣味や好きなものが似ている人とつながり、リアル空間では1人の時間を有効活用したい」という意見もあり趣味・娯楽を1人の時間において選択す

る価値があがってきているようにも考えられる。

## 2. 集団に身を置くことの必要性

1 では、1 人における時間は集団において過ごす時間よりも重要視されるべきその価値についていくつか述べてきた。けれども、これも先ほど述べたが現代社会を生きていくうえで自分以外の他者との関わりあいがある時間もまた多く、内向的な意識・姿勢よりも集団に対する意識向け、適応のためにも外向的な姿勢を求める意見もある。ここでは1で述べたことについて考えられうる反論について考えていきたい。

また、近年では1人であることは社会的危険性を孕んでいると述べる研究者も数多くいる。そんな彼らの述べる現象として「個人化」と呼ばれるものがある。

### 個人化

職業やライフスタイルや人間関係や消費などのあらゆることが社会の規範や規制といった枠組みによらずに、個人の選択の対象になってきたことを意味する。

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは現代の社会の流動化と個人化の特徴を「リスク化」という語で説明している（ベック 1998）。「リスク化」とは、いままで安全で安心と思われていた生活がリスクをともなったものとなることを意味する。ただし、それは、現代社会の治安が悪くなったとか、危険が増したということの意味するわけではない。それは、生活の多くの局面が自己選択の対象となったことにもなって、選択に失敗する機会もまた増えたということの意味する。そのような生活のリスク化は、近代社会の成立とともに始まった。つまり、近代になって「自分の生活を自分で選択する」という理念が成立したことにもなって、その選択によるリスクが生じてきたというわけである。

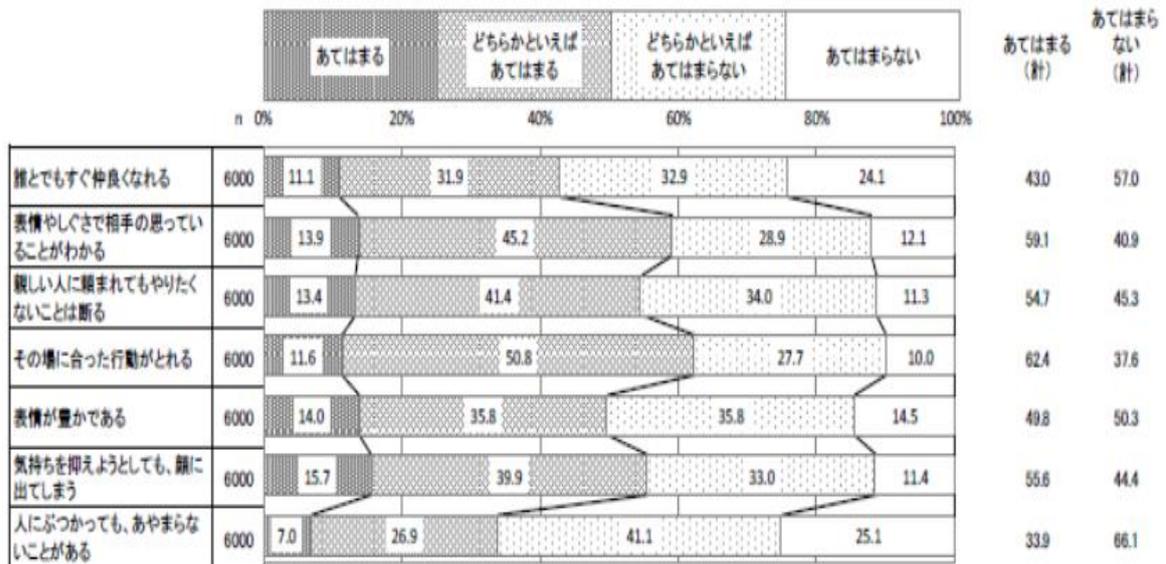
～小田亮 現代社会の「個人化」と親密性の変容：個の代替不可能性と共同体の行方 より抜粋～

このことから、個人の時間が必要であると述べる裏では、それを主とすることで何かしらを犠牲としなければならない可能性もあり、メリットばかりではないことを述べておきたい。

## 2-1. 周囲と合わせてつくられる自分

1-1 では集団における自身の在り方を再認識し、より高度な自分の在り方を創造するという自己内省の場としての役割があると述べた。しかし、集団という実際の場において他者と交流することでその振舞い方、自身がどうあるべきかを実践的に学んでいかなければいけないのではないかと、自分ひとりで内省するには限度があるのではないかと言う主張もある。そういった点において集団における時間の重要性について考えてみたい。自分らしさとあるが、近年では「多元的な自己」を指摘する先行研究がいくつかあった。浅野(1999)は若者の友人関係を調査し若者の多くが多重人格的な友人関係を求めていることを明らかにした。また、若者たちにとって「自分らしさは1つの自己イメージによってとらえきれないものであり、場面ごとに出てくるいくつもの自分のどれもがそれぞれに自分らしいのである」として、多元的な自己の存在を見出している。「子供・若者の意識に関する調査(平成28年度)」の「あなたは、他の人と付き合う時、次のようなことがどのくらいあてはまりますか。」という質問によると、「あてはまる(計)」において「その場にあった行動がとれる」(62.4%)、「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」(59.1%)の項目が高い割合を示している。また「あてはまらない(計)」においては「人にぶつかっても、あやまらないことがある」(66.1%)が高い割合を示している(表2-1)。若者の自己の多元化の進行と周囲に合わせた行動をとること、表情やしぐさをうかがうこと、周囲への気遣いとをあわせて考えると、集団というコミュニティーのなかで、それぞれの場にあった最善の自分を作り出し、自分のあり方を確立させようとしていることがわかる。このことから、ひとりで自分を顧みるよりも実際の場で実践的に自己を形作ることが現代においては効率性があるようにも考えられる。

表 2-1 つぎのようなことがどのくらいあてはまりますか



出典 内閣府 「子供・若者の意識に関する調査（平成 28 年）」

1 人の時間という殻に閉じこもって考えられる範囲には限度があり、それは自律性を養ううえでも同様のことだろう。その反論としては、「集団において同調は完全に否定されるべきものではない」といったことがある。理由としては、同調は集団に付随する特性であり、集団と切り離すことはできないからである。事あるごとに意見の対立が起きていけば、集団の存続は不可能となる。環境の変化に柔軟に対応して長期的に存続していくためには、さまざまな意見や信念を持つ人たちがいることが重要であるわけだが、集団の活動が円滑に行われるためには、ある程度の同調が必要なのである。集団規範に従うことが同調であると捉えることもできるわけだから、同調が集団を作り上げているとも考えられる。また、同調には道徳や倫理といった社会規範に反するものとそうでないものがある。同調が原因とみられている集団における事件や事故はあるが、問題を起こさない集団には同調が起こらないなどと考える人はいないだろう。どちらの集団にも同調は起こっているのである。つまり、同調の内容に問題があるわけで、同調自体が悪いものであるという見方はできない。

また、強い自己であろうが、弱い自己であろうが、自己決定は自己だけで遂行できるものではないという主張もある。自己決定には良くも悪くも必然的に「他者」の存在が介入してきて、その存在には大きく分けて 2 種類あるという。ドイツの社会学者ミースは「主体の自律性はある他者（自然、他の人間、自己の「下位の」部分）の他律性（他者によって

決定されること)に基づいているのである」(ミース.M 1993)と述べているように、1つは自己決定する本人にとってその決定事項を遂行するための「合目的存在」、あるいは「他律的存在」としての他者と、もう1つに必然的に「強い」自己であることができないと思われる人に対して何らかのかたちで支援を行う他者の存在があるという(桶澤 2005)。桶澤(2005)は、補完性原理に内在する個人と社会の相補性(人はどのような社会的・身体的諸条件のもとにあろうとも本性的に自己の目標を自力で達成できる存在であり、そしてそれを実現するためには、社会による「補完」的支えが必要であるが、しかし本人が自力で行えることまで、社会によって「補完」されてはならない)と、他者の権威の吟味さえ怠らなければ他者の判断に身を任せたとしても自律を損なうことにはならないとする手続的独立性(ドゥオーキン 1988)は、「強い」自己を前提とする前者の自己-他者関係を解体しつつ、「弱い」自己を前提とする後者の自己-他者関係を土台とした自己決定概念構築の契機となるのではないかと考えている。このことから、自律性を得るためには集団における他者の存在も無視できないものと考えられていることがわかる。

## 2-2. 趣味や娯楽の集団的つながり

1-2 では個人の時間における趣味・娯楽の時間が長らく高い割合で重要視されており、個人の時間が必要とされるべき要因の1つであるとした。けれども単純な疑問ではあるが、集団における趣味・娯楽には魅力はないのかという意見もある。

「趣味縁」という用語がある。加藤(2017)によると文字通り趣味を元としてつながる人間関係のことで、井上(1987)が初めて論考したものとしている。趣味縁の説明として、井上(1987)は「人々のあいだには、『目的(ないしは目標)達成のために』という目的志向もさることながら、『それ自体が愉しみのゆえに』という愉しみ志向の顕著な傾向が認められるのである」と述べている。また、加藤(2017)は趣味縁に関する先行研究から①社会的「有用性」からの脱却、②加入も脱退も個人の自由意思で可能である「選択縁」であること、③所属する社会集団内での既存の役割からの解放の3つの特性があることを示した。集団ではあるが拘束力のないつながりなのである。こういった「趣味縁」の存在から趣味を楽しみつつ集団特有のストレスを感じさせずに社会参加が可能であり、1人で楽しむよりも新しい公共圏を広げ自身の可能性を拡充できると考えられる。

### 3.個人の時間の在り方の見直し

2 では、個人における時間の意義に対しての集団におけるあり方、メリット等などに関連した考えられうる反論について述べてきた。やはり 1 人でいる時間よりも集団における時間のほうが社会的、自己形成面において優位な地位にあるのだろうか。けれども集団にもデメリットがあり、個人の時間でないと得られないものもあるに違いない。ここでは集団で過ごす時間に対する反論、個人の時間の必要性の再考慮という意味での再反論について述べていきたい。

#### 3-1.個人の時間における自分が本当の自分ではないか

2-1 では、近年の若者の場所ごとに適材適所自分を変える自己の多元化と他者との付き合い方において周囲に柔軟に適応する傾向の 2 点から、本当の自分を知るためには実際に集団の中で過ごし様々な自分を模索し本当の自己を知るという点においても有益な時間ではないかということ述べた。けれども、複数存在する自分の在り方からどの自分を主軸としていけばよいのか、どれが本当の自分かわからなくなるのではないかという主張も考えられ得る。浅野（1999）によると自己の多元化や柔軟性は「与えられた状況を生き抜くために彼らが身につけざるをえなかったもの」であると述べている。また小田（2007）は「自分らしさ」や「個性」や「キャラ」といった現代的な価値は、フレキシブルな自己として絶えず自律的に（すなわち他者との関係ぬきで）自己選択を行う一方で、現代社会の集団に適った個人を形成するためのものでしかなく、大切なのは、人びとが与えられた状況を生き抜くために行っている自己の多元化や柔軟化が、「自分らしさや個性を追求することでかえって自己を見失う」ことにならないような、他者とつながりうる自己の継続的な起点を見出すことにあるだろうと述べている。つまりは自分自身と一対一で向き合うことでわかりうる真なる自分を理解する、個人の時間における内省の場がこの現代においては欠かせないものになるのではないかと考える。

本当の自分を理解し自分を向上させるうえで、自分一人でいる時間は自律性を養う面でも、自分らしくあるという幸福を追求する面でも自己決定力を身につける習慣を持つべきであ

る。また、ここまで述べてきた同調についても、その影響を受けないためにも必要であるが、集団という社会の居場所を維持するためには同調の力は少なからず必要であり、同調は集団を形作っているパーツの一部であることから完全に否定することはできないというのがここまでの話の流れである。ここで言えることは、「同調における悪影響をはっきりとさせ、個人の時間における自律力の獲得の意義を再認識するべきではないのか」ということである。

同調による悪影響の結果起きてしまった事件として「大邱地下鉄放火事件」がある。2003年2月18日、通勤ラッシュが一段落した韓国・大邱市の中央路駅で放火による火災が発生し、これにより約200人の人命が奪われてしまった。しかし、その中では煙が充満しつつある車内に乗客が座席で黙って座っているという通常では考えられない状況が起きていたという。防災・危機管理アドバイザーの山村は、これは「多数派同調バイアス」に陥ってしまったことから起きてしまった現象であると述べている。過去経験したことの無い出来事が突然身の回りで起きたとき、人はその周囲に存在する多数の人の行動に左右されてしまい、どうして良いか分からない時、迷ったときは周囲の人の動きを探りながら同じ行動をとることが安全と考える「多数派同調バイアス」に、心が支配されてしまうのだという。現代日本においてそこまで極端なことは起こらないと思われるが、集団の動きに合わせ心の安寧を図ろうとするという点においては同意できる。その結果自分では正しいことと思いき、かつ客観的に見ても正しいことでも、自分以外の多数がそれとは違う動きをとっていれば、たちまち集団で孤立するのではという不安感に襲われ、正しくないとわかりつつも逆の行動をとってしまう危険性がある。そういった同調による自己の埋没を防ぐためにも、個人の時間における単に「これからなにをするか」という簡単な場面においても、「自分がこういったことをしたい」という主体性を持つことで小さいことではあるが自分で考え、行動する力、自己決定力を身につけていくことで自律を促すことにおいて集団における時間よりも個人の時間における価値を見出せると考えた。

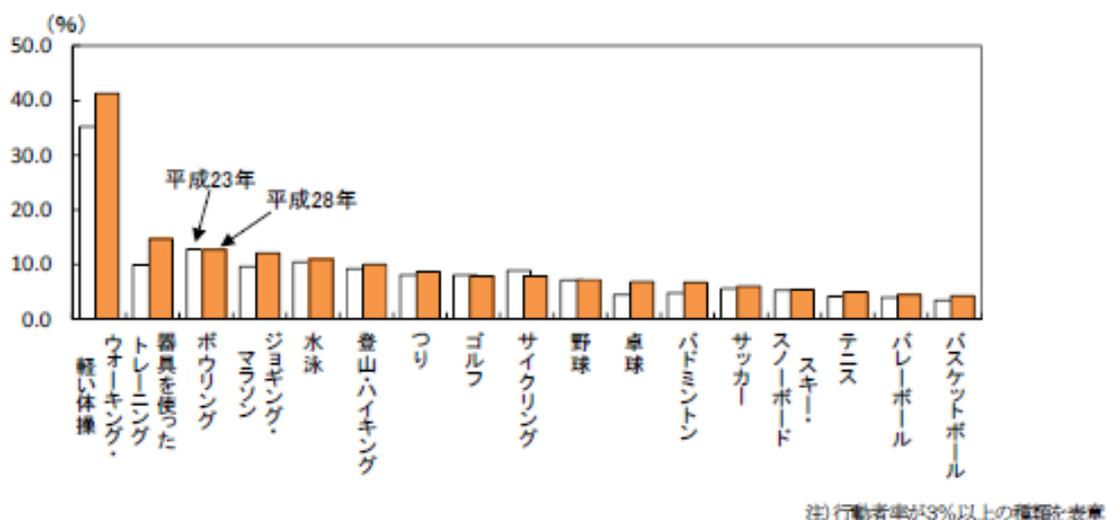
### 3-2.個人の時間と適応する趣味

2-2 では、趣味縁という若者たちの新たな集団における人間関係のありようとしてそれにおける趣味・娯楽という共通概念によって既存の集団における固定化された役割から開放され、自由なかつ新たな関係性を構築できる点から、個人で趣味を楽しむよりもこういった新し

い社会的つながりのなかにいた方が利点が多いのではないかということについて述べた。けれども、集団において個人ごとの趣味に対する熱量には差異があるわけで、誰しもが趣味を媒体に良好な関係を作っていけるとは言い難い。また、1-2では「ひとり〇〇」といったおひとりさまビジネスが拡大してきており人気を得ていることを述べた。そうしたことから現代人が求めている趣味・娯楽そのものも個人で楽しめるように時代が進むごとに変わっていったのではないか。そこで本節では反論と言うかたちではなく個人の時間における趣味・娯楽に対し現代においてどのような要因が影響しうるかについて論じてきたい。

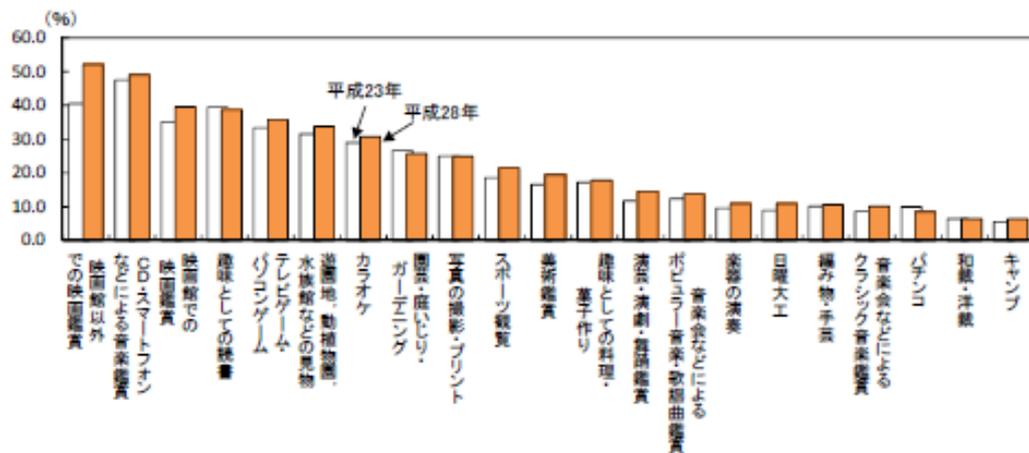
「平成 28 年度社会生活基本調査-生活行動に関する結果-」の「スポーツ・趣味・娯楽」の種類別行動者率によるとスポーツにおいては「ウォーキング・軽い体操」（41.3%）が最も高く(表 3-1)、趣味・娯楽においては「映画館以外での映画鑑賞」（52.1%）が最も高い割合を示した(表 3-2)。

表 3-1 スポーツにおける種類別行動者率



出典 総務省 統計局 「平成 28 年度社会生活基本調査-生活行動に関する結果-」

表 3-2 趣味・娯楽における種別行動者率



注) 行動者率が5%以上の「趣味・娯楽」の種類を表章

出典 総務省 統計局 「平成 28 年度社会生活基本調査・生活行動に関する結果」

スポーツにおける「ウォーキング」は中高年に人気のイメージが強いが、最近では運動不足に悩む若年層や大学生からの支持も多く、ウォーキングをメインとしたイベントなども各地で開催されている。支持される理由として、健康志向の高まりがある。メディアによる健康を取り扱う番組・報道が増加したことが1要因としてある。そうして以前よりも健康増進に関する情報が周囲を取り巻くことが多くなり、敷居が低く無理なくはじめられ趣味と実益を兼ねることができ人口が増加したと考えられる。

趣味・娯楽における「映画館以外での映画鑑賞」は安価でレンタルショップで借りることができることや、一定の金額を支払えば自分の好きな映画が見放題な「Netflix」や「Hulu」に代表される動画配信サイトの登場が影響として大きいと考えられる。どちらも少額ではあるがお金を払うだけで楽しむことができるという簡易性に魅力を感じさせるのだと考えられる。

双方の共通点としては、比較的簡単にはじめられるとつきやすさ、かつ今回のテーマでもある個人の時間でも十分に楽しめることがある。また、「全国消費実態調査」のデータから、若年層の消費支出は 2014 年時点で減少傾向にあり消費を抑えている傾向にあることから、趣味の選択肢に「いかに少ない支出でどれだけ続けられるか」というものも出てきうると考えられる。

表 3-3 30 歳未満の単身勤労者世帯の消費支出と消費性向



出典 総務省 「全国消費実態調査」

以上のことから、現代の個人の時間における趣味・娯楽には少ない出費であること、簡単にはじめられることといった現代的要因が影響を与えているのではないかということが明らかになった。趣味・娯楽も以前のような用具をそろえる必要があったり、とりつきにくいものから現代人に受け入れられやすいものへと変容していつているのである。

おわりに

今回は個人で過ごす時間について、「自己内省を通した自律性の獲得」「趣味・娯楽」の2つの視点から、その現代における必要性について論じてきた。「集団でいるほうがワイワイできて楽しいじゃん」「(ひとり) ボッチでさびしくないの?」といった集団至上主義的な発言を大学在籍中幾度となく耳にしてきた。けれども、ひとりでいるほうが気を遣わなくていい、よりディープな趣味・娯楽を楽しめる、何事も自分で決めたほうが成長できるといった個人の時間のメリットを唱え、自分らしく生活する人たちも数多く見てきた。

本稿で述べた自由で拘束性のない社会的つながりである「趣味縁」や「同調」により個人の意思の埋没が起こるように、近代化によって集団におけるあり方がよい風にも見られ、かたや悪いようにも見られていることから、現代においては「集団」というのは不安定な空間であるようにも感じられた。

今回挙げた「自己内省を通した自律性の獲得」「趣味・娯楽」はいずれも集団における他者が大きな要因として関わってくる。技術の発達によって私たちはさまざまな場面でつながる力を手に入れてきたが、それは自身で考える自己を作り上げていく力を低下させるばかりでなく、個人がもたらす恵みを享受できなくさせているように感じられる。「地域間のつながり」や「絆」などが大切だとはよくいわれることであるが、つながることが容易になると「つながる力」というもの自体に価値がなくなり、「つながり過ぎ」の弊害が目立つようにも思われる。過剰につながっていることにより自分の世界が侵食され、自分を磨く時間も奪われていくとしたら、どうにかしてつながり過剰の状態から脱出する方法を模索していき、日ごろの自分の生活を、ひとりでじっくりと見直してみるべきではないだろうか。

## 参考文献・URL

- ・井上俊・船津衛[編] 2005 「自己と他者の社会学」有斐閣アルマ
- ・吉田圭一 1998 「余暇と余暇活動を探る」武庫川女子大紀要(人文・社会科学) 37-44
- ・浅野智彦 1999 2章 親密性の新しい形へ 富田英典・藤村正之(編) みんなぼっちの世界 恒星社厚生閣
- ・井上忠司(1987)「社縁の変容」,栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』ドメス出版, 244-259.
- ・加藤康子(2017) 趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例 -群馬県前橋市「前橋〇〇部」の事例から- 文化経済学第14巻第2号(通算43号)
- ・小田亮 2007 現代社会の「個人化」と親密性の変容: 個の代替不可能性と共同体の行方 日本常民文化紀要 26巻 188-156
- ・桶澤吉彦 2005 「自己決定/自律」および「自己決定権」についての基礎的考察—支援/介入の観点から— Core Ethics Vol. 1 (2005)
- ・内閣府 平成30年度「国民生活に関する世論調査」  
<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-life/index.html>
- ・内閣府 平成11年度「国民生活に関する世論調査」  
<https://survey.gov-online.go.jp/h11/kokumin/index.html>
- ・内閣府 平成28年度「子供・若者の意識に関する調査」  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h28/pdf-index.html>
- ・総務省 統計局 平成28年度「社会生活基本調査-生活行動に関する結果-」  
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/>
- ・防災・危機管理心理学 防災システム研究所 HP  
<http://www.bo-sai.co.jp/bias.htm>